

第一言語会話と第二言語会話の修復連鎖における笑いの考察

—非優先性を和らげるための笑いの使用—

笠高駿（神奈川大学大学院生）

1. はじめに

本研究では第一言語、および第二言語会話における他者修復後の笑いという現象に焦点を当て、会話参加者が修復連鎖において笑いという行為を通して何を達成しているかを会話分析の手法を用いて検証を行う。

これまでの会話分析研究では、相互行為における笑いは社会的かつ組織化されて生み出されることが実証されている (Glenn & Holt, 2013; Jefferson, 1984)。また、デリケートな行為を和らげる際に会話参加者が笑いをを用いたり、非優先的な発話をする際の笑いの発生に関して検証がなされている (Glenn & Holt, 2013; Haakana, 2002)。Glenn & Holt (2013) はこのような環境下で笑いが生じる 1 つの理由として、笑いには「相互行為において潜在的に問題のある発話や行為を修正し、緩和する能力」(p. 16) が備わっているためであると説明している。

近年、修復連鎖における笑いがいかなる行為を達成しているのか様々な側面から分析を行う研究 (Petitjean & González-Martínez, 2015; Theodórsdóttir, Eskildsen, & Wagner, 2023) が進んできたが、他者修復後の笑いに焦点を当てた会話分析研究は未だ少ない。本論文では、これらの過去の研究を発展させ、会話分析の見地から第一言語、および第二言語における会話で会話参加者がいかにして「笑い」という相互行為上の資源を用いて他者修復を行っているのか検証を試みる。

2. データ

本研究で分析された会話データは計 4 つである。そのデータのうち 3 つは、日本の大学の国際寮で録画、録音された会話データで、(a) 日本語の第二言語会話 1 つと、(b) 英語がリンガフランカとして使用されている第二言語会話 2 セットである。もう 1 つは、会話参加者の一人の自宅で行われた会話で、日本在住の友人同士の日本語会話 1 つである。日本語の第二言語会話は、日本語を第一言語とする話者 2 人と第二言語とする話者 1 人の計 3 人による 1 時間程度の会話である。一方で、英語をリンガフランカとして使用していた第二言語会話は、英語を第一言語とする話者 1 人と第二言語とする話者 3 人による 1 時間程度の会話、さらに、英語を第二言語とする話者 5 人による 1 時間程度の会話の、合計 3 時間程度の会話である。

3. 分析結果

分析の結果、第一言語話者同士の日本語会話、また、日本語および英語の第二言語会話のデータにおいて、二種類の他者修復(訂正)、すなわち、緩和されずに行われる「無調節の他者訂正(西阪, 2010, p. 220)」と、質問形式によって調節を受ける「調節された他者訂正(西阪, 2010, p. 218)」が展開されていたことが分かった。以下では、まず、いかなる緩和もなく行われる無調節の他者訂正の修復連鎖について提示した後、質問形式によって調節が行われ、笑いが生じることで緩和される他者訂正について分析する。

3.1 無調節の他者訂正

自己開始他者修復(self-initiated other-repair; Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977)の修復連鎖の過程で、修復の自己開始に続いていかなる緩和もされずに他者修復が行われていたことが観察された。下記の事例(1)は、国際寮における英語の第二言語会話のデータより抜粋したものである。

事例(1) [TL2&ML1: English Conversation: Russian Roulette 2]

((“h)” indicates laughter in the utterances. “¥” indicates a smiley voice.))

- 01 Taka: so these are (.) for ((Taka points at some sushi))
 02 (.)
 03 Taka: ro- rossian roul(h)ett(h)es¿ hh ((Taka gazes at Leon, as seen in Figure 1.))
 04 Leon: for [what?]
 05 Mark: [rossian] roulette.<=
 06 Taka: =° rossian rou[lette°]
 07 Gary: [¥rossian] roulette.¥
 08 (0.9) ((Leon opens his mouth in the shape of an “oh” and raises his eyebrows, as seen Figure 1.))
 09 Leon: [yeah.]

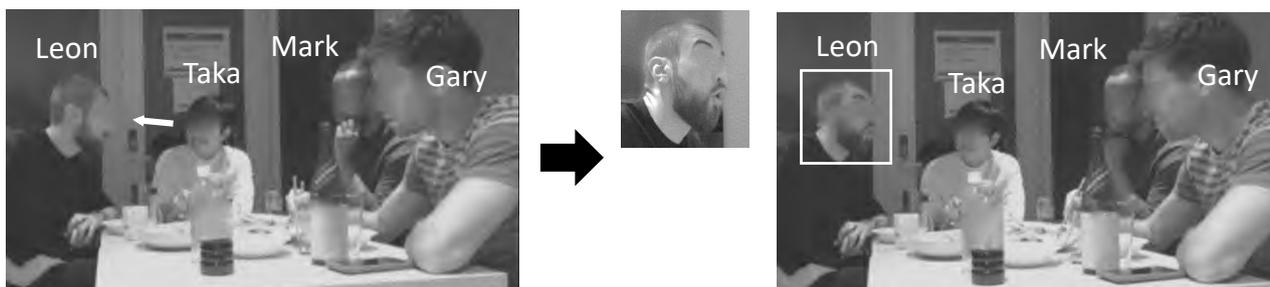


図1 Leonの表情の変化から読み取れる知識状態の変化(a change-of-state-token; Heritage, 1984)

1行目から3行目にて、Takaは指さしによって示している寿司をロシアルーレットというゲームで使用することを他の会話参加者に提案する。3行目で、Takaは語彙の正しさを確認するために語尾を上昇調のイントネーションで産出する(Hosoda, 2006)と共に、笑いながら発話を産出することで何らかの問題(発話の産出の問題)が生じていることを暗示し、修復の自己開始を試みている。続くLeonの発話では、図1の左の画像内で示されるようにTakaの視線が向けられたLeonの表情は変化しておらず、Takaの発話の一部である“ro- rossian ¥roul(h)ett(h)es¿ hh¥”という発話を疑問詞のwhatに置き換える修復の開始により、聞き取り(または理解)の問題に直面していることを示している。すると、5行目で、MarkがLeonの発話と重なるように“>rossian] roulette.<”とTakaの発話とは異なる強勢位置でその単語産出することで、無調節の他者修復を行っている。Markによるこの他者修復によって、Leonの理解の問題を解決する。図1の右の画像内で示されるように、Leonは「知識状態の変化を示す標識(a-change-of-state-token; Heritage, 1984)」である“oh”という形に口を開け、眉を上げる表情を0.9秒間の沈黙の間で表出し、続く発話で“yeah.”と産出して理解を示すことで、この修復連鎖が終結している。

この事例のように、無調節の他者訂正は、問題源を含む発話をした話者による自己開始の修復に続いて、緩和されずに問題のある発話にのみ対処する簡潔な TCU (Turn Constructional Unit; Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974) で展開されるという特徴が見られた。

3.2 調節された他者訂正

他者開始他者修復 (other-initiated other-repair; Schegloff et al., 1977) の修復連鎖の過程で、質問形式によって調節され、その後には笑いが生じることがあった。分析の結果、この笑いによって他者修復を行うことの非優先性を和らげている可能性が示唆された。以下の事例 (2) は、国際寮の日本語会話のデータである。

事例 (2) [ユウヤ&タカ: 国際寮日本語会話: くりがだ]

((この会話の直前で、ユウヤとタカは国際寮の近くにあるバス停の話をしている。))

01 ユウヤ: さんじゅうろく (.) 系統が、この (0.5) くりがだで降りると、

02 タカ: °う::ん°=

03 ユウヤ: =この前を通って、(0.7) くれるんすよね.

04 (1.9)

05 タカ: くりたや°じゃないん°

06 (0.6)

07 ユウヤ: >あ くりたや=<

08 タカ: >=A HAH HAH HAH< くり- .hhh °huh huh huh°

09 (1.4)

10 タカ: くりがやってどこだろう.=

11 ユウヤ: =huh huh [huh] ((食べ物を咀嚼しながら))

12 タカ: [huh] huh

この事例の冒頭から 3 行目にかけて、ユウヤは 36 系統の市営バスが「くりがだ」という停留所で止まるという話を続けている。このユウヤの「くりがだ」という発話が後の問題源であるが、この時点ではユウヤは問題源として扱うことに志向していない。続く 4 行目の 1.9 秒の沈黙の後、タカが「くりたや°じゃないん°」と付加疑問文の形式によって調節された他者修復を行っている。続く 0.6 秒の沈黙の後、ユウヤは「あ」という新しい情報を得た際に発せられる前置き (Hayashi & Hayano, 2018) に続いて、問題源の発話を繰り返すことによって修復を受け入れている。そして、ユウヤが受諾した直後に、タカはその訂正を緩和するために「>=A HAH HAH HAH<」と笑いを産出している。続く 10 行目で、タカが問題源の発話について言及し、その後、ユウヤとタカは笑いを共有しており、続く相互行為において、2 人の間に敵意や居心地の悪さのようなものがないことがわかる。

事例 (2) のように、発話者が自身の問題源を含む発話の修復開始をしていない場合に、その後の発話順番で他者による修復が戦略的に展開されることがある。この他者修復は、質問形式 (付加疑問文や確認要求) によって調節され、さらに、問題源の発話者がその修復を受諾した後に、訂正という行為を「笑い」によって和らげているようである。そして、会話参与者間で共有される笑いによって、ここで観察された修復連鎖は敵意や居心地の悪さを顕在化することなく終了していた。

4. まとめ

本研究では、第一言語、および第二言語会話における会話参加者が、特定の修復連鎖において笑いという行為によって何を達成しているか検証を行った。分析の結果、緩和されることなく行われる「無調節の他者訂正」とは対照的に、質問形式によって調節された他者訂正がさらに笑いによって緩和されることがあることが明らかとなった。調節された他者修復では、問題源を含む発話者に対して修復(訂正)を行う際に、笑いという行為を通して訂正した事に対する居心地の悪さのようなものを緩和するという相互行為上の仕事を成し遂げているようである。実際、他者修復を行った話者の笑いに続いて、問題源を発した話者による笑いも起こって共に笑うということが観察され、その後の相互行為に話者同士の敵対性はみられない。これまでに他者修復は第一言語会話においても(Schegloff et al., 1977)第二言語会話においても(Hosoda, 2000)非優先的なものであると実証されており、今回の研究によって明らかになった他者修復後の笑いは、他者修復の非優先をさらに裏付けると考えられる。

参考文献

- Glenn, P., & Holt, E. (2013). *Studies of laughter in interaction*. Bloomsbury.
- Haakana, M. (2002). Laughter in medical interaction: From quantification to analysis, and back, *Journal of Sociolinguistics*, 6(2), 207-235.
- Hayashi, M., & Hayano, K. (2018). A-prefaced responses to inquiry in Japanese. In J. Heritage & Sorjonen, M. L (Eds.), *Between Turn and Sequence: Turn-Initial Particles across Languages* (pp. 193-223). John Benjamins.
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structure of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 299-345). Cambridge University Press.
- Hosoda, Y. (2000). Other-repair in Japanese conversations between nonnative and native speakers. *Issues in Applied Linguistics*, 11, 39-65.
- Hosoda, Y. (2006). Repair and relevance of differential language expertise in second language conversations. *Applied Linguistics*, 27(1), 25-50.
- Jefferson, G. (1984). On the organization of laughter in talk about troubles, In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 346-369). Cambridge University Press.
- Petitjean, C., & Gonzalez-Martinez, E. (2015). Laughing and smiling to manage trouble in French-language classroom interaction. *Class Discourse*, 6, 89-106.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), 696-735.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361-382.
- Theodórsdóttir, G., Eskildsen, S. W., & Wagner, J. (2023, June 26-July 2). *Laughter in repair and correction sequences in multilingual talk* [Paper presentation]. International Conference on Conversation Analysis 2023, Brisbane, Australia.